

「新しい地域づくり」を目指す「ことぶきの里」 松江認知症家族の会有志が見学

師走の小春日和の 22 日、松江認知症家族の会 有志 5 人が出雲市古志町の小地域相互ケアホーム「ことぶきの里」を訪問しました。「ことぶきの里」は小規模多機能施設を全国に波及させた 槻谷和夫 (65) さんが昨年春開設。戸建て 9 棟と交流棟で構成。要介護者と家族が一緒に住め、 プライバシーが守られ施設臭さも一掃。緊急時には隣接の施設の助けも受けられるという、新しい「地域づくり」を目指しています。槻谷さんは小規模多機能にも限界があるとして長年の構想 の末に「小地域相互ケアホーム」に辿り着いたとしています。槻谷さんは社会福祉法人ことぶき 福祉社会の代表者であり、家族の会県支部顧問でもあります。見学者 4 人から感想を寄せてもらいました。

これまでの福祉制度にはない

田畠の残る住宅街の中に新築のゆったりした平屋建が 9 軒並び、新しい町内が誕生したといった印象だ。案内していただいた交流棟は、明るく和洋折衷の間取りと設備が開放的で、食事会や会合など自由に利用できるとい う。70 代の男性一人で入居されている方や一歳児の子育てをする若いご夫婦、要介護のご夫婦など様々な 9 世帯 18 人が暮らす。これまでの福祉制度にはないことぶき福祉会独自のもので、今後制度化により、各地に広まるよう取り組んでいること。自由な発想と現実に合った暮らし方を考えた提案は、終の棲家を考えるうえで、重要なヒントを感じた。

(新村裕美)

高齢者の夢の住宅

プライバシーが守られ、それでいて困ったことがあれば、つい近くにプロの介護士さんや住民の方がおられるので安心して生活できるだろう。これは高齢者にとって夢の住宅だと思った。意外だったのは、一歳の赤ちゃんをつれた若いご夫婦が、子育てに良い環境としてこの里へ越して来られたとのこと。高齢者にとって住みよい社会が、これから育つ子供にとっても最適であるとのことで、興味深いと思った。

(清水綾子)

今後の展開に注目

小規模多機能型施設を考案された槻谷さんが実践の末に辿り着かれた新しい形の“施設”。確かに入居する人にとっては理想の形だと思

う。ただ、将来的にはこの 9 戸だけで完結するのではなく、地域に受け入れてもらい地域と共に助け合う仕組みが必要だと思う。この 9 戸が核になって、その思想が地域に波及していくのか、そうならないのか。入居者と槻谷さんの今後の取り組みに目が離せない。

(長谷川正樹)

社会の需要を先取り

槻谷さんは事業者として確かな先見性を持っておられるので、造語の「小地域相互ケアホーム」もいずれ国が認知することになるでしょう。農漁村の田舎はともかく、市部の連帶感の希薄さは私もいつも感じているところで「ことぶきの里」は社会の需要を先取りしたと直感しました。ただ、新しい「地域」をつくることにも相当なエネルギーを要すること



になると想像します。そりが合うもの、合わないものの様々な人々の集合が「地域」であり地域には歴史があります。地域の歴史を知ることで今を生きる手がかりを得られないか、とか趣味やボランティアなど物理的な距離を超えて「地域」ができるいかなどと私は考えています。

(木谷節夫)

小地域相互ケアホーム「ことぶきの里」の見聞記

—理想郷のオープンにおもう—

Cグループ 中垣 満枝

見学の日

「ことぶきの里」に、ぶどうの会会員他7名で、3月1日午後訪問しました。陽が大きく西に傾く4時前、日焼けした精悍な顔の楢谷理事長は、2人の女性職員とともに私たちを出迎えてくださいました。



南東側居住棟玄関前の余裕ある空間

価値な家賃設定は、資産の有無にかかわらず、誰にでも利用できるように、収益を度外視したという。楢谷理事長の日焼けは、連日建築現場に立ち会ってのものと推察しました。全国から寄せられた寄付金 6,206,000 円は、里内をつなぐ緊急通報装置の設置費用と公園整備費用の一部にあてたとのことでした。

敷地約 900 坪の敷地にゆったりとした空間を保ちながら建てられた戸建ての住まいを見学しました。建物は、最新の設備と長めに設定された償還期間に耐えられるよう、良質な建材が使われているように感じました。



交流棟北側に広い里庭（広場）が整備されている。植樹はどう変化するか

福祉と医療の一体化と「住みなれた町で一生を」とは・・・

個人的なことですが、私は定年退職まで、仕事をした小中学校の世界しか分っていました。タイムリーに、ホームヘルパー2級資格を取り、半ば好奇心で全く未知の



交流棟の調理設備

世界に再就職。それは楢谷さんが先駆的に始めた同じ型の小規模多機能介護施設でした。夜の職員会議に時間外手当が出る厚遇でしたが、2ヶ月で辞職しました。それは、母が大腿骨骨折で入院しその見舞いに松江から通い始めたからです。

入院（江津市）、<往復>転院（川本町・120 日）

→有料老人ホーム（桜江町・30 日）→特養（大田市・1 年半）→病院（大田市・4 日）。母が 70 年住みなれた家から出ての居所と日数です。940 日の間 8 回転居し、最期は病院で私が見守るなか旅立ちました。母は嫁して 3 人の娘を産み、8 年後に夫に先立たれため、女手ひとつで家具店を経営しながら子育てしました。私は「母を孤高な寂しさに置けるものか」と、母の心の底にある「ドコ？ナゼ、ココニ？」に寄り添い、600 日通いました。



トイレ・洗面台

「特養は生活するところで、医療をするところとは別です」と言われ、大いに悩むことになりました。病気の兆候に気づき伝えても、通院は施設スタッフの都合できまり、嘱託医も 90 歳に近い高齢者だからとまともに受け付けてくれません。母は「まだ呼べんでもええいうて判断ができるゾ」と殊勝なことを言って見せたり、時にはトンチで爆笑させたりと、どちらが慰められているのかという日もありました。

福祉は携わる人の情熱と創造性で革新的に改善される



上：ユニットバス（姿見）
下：システムキッチン
(加藤さんには高かった)

「ことぶきの里」で生活をはじめる人は、ゼロからの出発で希望と不安を持たれることでしょう。心身どのようなハンディがあっても、ここでは速やかな手立てが講じられることでしょう。福祉と医療が一体となり基本的人権が守り抜かれるはずです。

「交流棟」に常駐することになる楢谷さんと職員に会い、一層強くそう思いました。

「一生懸命すれば人が助けてくれる」と教育の世界で先輩方から聞いたことばかり、まっしぐらに実践し、不可能を可能にしてきた里の助っ人と共に、里人も相互の思いやりと信頼の中で安心して人生を終えられるでしょう。



里のゴミ収集ボックス

「住民憲章」はあるのですかと訊ねると、「必要なら里の人たちで作られるでしょう。」との返事。そうですね！「学級はみんなが主人公」里人も然り、教育と福祉の共通点でした。平成の「新しき村」はいよいよオープンです。「高齢者の明日をよくするぶどうの会」の一員として、この理想郷に熱い視線を送り続けていきます。

(本文中の写真・コメント：周藤重夫)

新たな社会福祉提供の場

「小地域相互ケアホーム“ことぶきの里”」が誕生

勝部 あき

“介護が必要になっても安心して望む生活を送りたい”、そして、“できることなら自宅や自分が納得した場所で生活したい”、これはきっと多くの人が望むことではないだろうか。現在、介護が必要になり在宅で生活が難しい人は介護施設やグループホームなどに入所することが選択肢として挙げられるが、戸建の生活に慣れた人にとって特に介護施設のような大きな建物には違和感や抵抗感を抱く傾向にある。そして、住み慣れた地域で暮らしたいと望んでも、地域で生活することが難しければその地域から離れ、介護施設等に入所するという選択を余儀なくされる人も少なくない。そんな中、新たな社会福祉提供の場として「小地域相互ケアホーム“ことぶきの里”」が島根県出雲市に誕生した。簡単にいうと、高齢者だろうと障がいがあると、福祉提供の場が分類されることなく、皆で助け合いながら地域を創っていくというものだ。これは、地域密着小規模多機能老人ホームを生み出した社会福祉法人ことぶき福祉会理事長の楢谷和夫氏の考える「社会福祉構想」が形になったものの一つである。

楢谷氏は、1987年に当時としては珍しい高齢者介護を創り出した。それは、地域の高齢者を対象に通所と宿泊のサービスを提供する「ことぶき園(同法人)」における事業である。大規模な介護施設が当たり前だった時代に、利用される人が馴染みやすい「地域密着」で、より家庭的な雰囲気に近い「小規模」で、そして利用する人の

その時々のニーズに沿えるよう「多機能」を基本に、細やかなサービスを実践している。この実践は後に制度化され、現在の「小規模多機能型居宅介護」として全国に広まっている。ことぶき福祉会はその原型である。このように、ことぶき福祉会は高齢者介護のあり方を追求し続け、その結果として介護現場や福祉制度に影響を与えてきたわけだが、そのことぶき福祉会が2011年より構想を練ってきた新たな社会福祉提供の場が誕生したのだ。これは、高齢者福祉という狭い枠内でのサービス提供ではなく、社会福祉・地域福祉といった対象者や枠を設けない本来の福祉のあり方として楢谷氏が思い描いてきた福祉提供の形であり、わが国においても初の試みとなる事業である。

【小地域相互ケアホームことぶきの里とは】

小地域相互ケアホームとは、ことぶき福祉会が考案した造語である。ここは一般的な介護施設とは異なり、全て「戸建」であるのが最大の特徴といえる。戸建が立ち並ぶその光景は、介護施設のように馴染みのない異空間ではなく、まさに地域そのものである。2000年に介護保険制度が施行されて以降、入居スペースが多床型から個室化へ移行してきているが、個室化を図るということでは生活の場・人生の場としては成り立たない面もある。ところがここは戸建であるため、生活行為を果たすのみの視野の狭い考え方ではなく、生活の場を人生という壮大な居住空間として捉え、地域の人との一定の距離を保ちながら完全にプライベートな空間が確保できている。これは、一つの居住空間を施設のような個室ではなく、戸建にしたからこそ守られる個別の空間で、これこそ我が家といえよう。考えてみれば、介護が必要になったからといって、集団的な空間で生活することが当たり前なわけではない。人が望む個別の空間を確保するためには「これからは戸建の時代だ」と楢谷氏は福祉提供の場のあるべき形をそう述べている。ただ、戸建にすると心配なのが“緊急時”である。ある程度自立できていなければ、何か起きたときに自力で対処することが困難であり、それは安心して生活することにも大きく影響する。そこでことぶきの里では、各戸に緊急通報装置を設けることで緊急時の対応を担保している。装置が起動した場合、全戸に通報され、ここの理念である“相互の助け合い”として住民同士で対応できる体制を設けている。特に、独居の高齢者にとっては安心できる要素の一つだ。



それ以外にも敷地の隣には、同法人が運営するグループホームとデイサービスがあり、緊急時は勿論のこと、希望すれば臨機応変に介護保険制度内外のサービスを受けることを可能にした。そして、敷地中心部には交流棟があり、気軽に利用できる空間が整備されてあるなど、専門的なサービスだけではなくインフォーマルな視点においても、より互いが馴染む関係づくりが構築できる環境を提供しているのだ。

【従来の介護施設との違いは何か】

まず、ここは施設ではない。ごく普通に地域の中で誰もが安心して暮らすことができるよう一部の体制を整えた、これまでの福祉制度にはない新しい形である。この理念に賛同する人なら、例え介護を要していないとも入居が可能である。望めば家族や友人とも同居ができる。介護施設では、高齢者も障がい者もその介護を受ける人が入所の対象であり、家族が一緒に入所することはその家族も要介護状態でサービスの対象でない限り認められていない。福祉提供の場でありながら家族と生活を共にできないということは、要介護者にとってもその家族にとっても悲しい現実である。だがその入居すると別居を余儀なくされるという現状を覆し、要介護状態になってしまっても家族と生活することを可能としたのがこのことぶきの里である。顔なじみの関係を一からつくりながら、住民一人ひとりが互いに助け合い、必要であれば希望に沿った福祉や医療、保健の利用ができる。そして、施設のように四六時中誰かに干渉されることもない。ここでは玄関を介さなければ他者の視線を気にすることはないということだ。あくまでも当たり前の社会生活がここには存在している。



【現在の状況】

8月現在では全9戸の内7戸が入居済、9月には更に1軒の入居の予定があるという。入居状況は、高齢者の独居世帯や高齢の夫婦世帯、若年者の独居世帯、そして親子世帯など、下は幼児から上は90代までの人人が各戸で生活している。これまでに交流棟では“顔合わせ会”“カレー作りの会”など催し物も開催された。現段階では理念に掲げたような助け合いとまではいってはいないものの、徐々に顔なじみの関係が築けているようだ。90代の住人は、隣接するグループホームの職員が食事に誘ったところ、食事サービスを受けながら他者との交流の機会を設けるようになったとのこと。自立心が高くとも、一人で生活するのは誰もが寂しいものである。そんなときに周囲の人との交流が保てたり、楽しく食事ができたり、帰れば一人の空間が保てたりする。ことぶきの里はそういう当たり前の生活が担保された場所なのである。他にも、入居者の家族が毎日のように顔を見に来ているとのこと。介護施設での面会では、おそらく気を遣いながら来ている家族も、ここでは戸建であるため“普段着”で遊びに来ることができる。このような状況に「周囲に気を遣うことが施設に比べ少ないため、家族にとっても来やすいのではないか。ここが介護施設と違う点の一つだ」と楢谷氏は述べている。

【今後の構想と課題】

今後の構想としては、交流棟に喫茶店や居酒屋などを設け、ホーム住人だけでなく地域の人も気軽に利用ができるような場所も提供していきたいと考えていること。専門的なサービスを介すとサービスの提供に制約が生じてしまうが、地域に顔なじみの関係を互いにつくり、そして、そこで生活する全ての人が高齢や障がいといった枠に括られず、必要な手が差し伸べられるような福祉地域があれば、例え介護が必要になっても安心である。そして、この職員の関りのように、専門職が仲介になることで交流が生まれるというのは、町内会も崩壊されているような今の時代には特に必要な点ではないだろうか。介護の要否にかかわらず、地域で生活する上でどんな状態でも“助け合い”が福祉(幸せ)を生む、そんな地域を一から創りたいとの思いから小地域相互ケアホームことぶきの里は誕生した。将来的には制度化を望むが、「まずは実績をつくること。そして、建物だけではなく中身がともなってこそ重要だ」と楢谷氏は語っている。今後の動向が気になるところだ。